

原因の使役文に関する覚え書き

阿 部 忍

0. はじめに

日本語の使役文の中には、使役主の意味役割が＜動作主＞ではなく＜原因＞であるようなものが存在する。例えば、次の(1)～(3)のような文がそうである。

- (1) 会社の倒産が彼を悩ませた。
- (2) 娘の結婚が彼女を喜ばせた。
- (3) 地下鉄サリン事件が国民を震え上がらせた。

上の3つの文においては、それぞれの使役主の位置にある「会社の倒産」「娘の結婚」「地下鉄サリン事件」が、いずれも＜原因＞を表している。ここでは、このようなタイプの使役文を「原因の使役文」^(注1)と呼んでおく。

本稿では、原因の使役文に見られる格パタンの制限について記述し、可能な分析を提示する。

1. 原因の使役文の格パターン

1. 1.原因の使役文の範囲

前節の(1)～(3)の文は、いずれも元の動詞（「悩む」「喜ぶ」「震え上がる」）が感情動詞であり、このタイプが原因の使役文のもっとも典型的なものといえるだろう。

しかし、次の(4)～(6)のような文では、元の動詞（「(フィリピンへ)行く」「(法を)犯す」「踊る」）は感情動詞ではない。

- (4) 日本に対する絶望が彼をフィリピンへ行かせた。
- (5) 貧困が彼に法を犯させた。
- (6) 祭りの開放感が彼女を大胆に踊らせた。

にもかかわらず、(4)～(6)のような文は、(1)～(3)のような文と同様に使役主の意味役割が＜原因＞であり、同様に（すなわち原因の使役文として）扱われるべきであると考えられる。

従って本稿では、(1)～(6)のような文を全て原因の使役文として考察の範囲に含め

ることとする。

1. 2.原因の使役文の格バタンの制限

上の(1)~(6)のような原因の使役文では、元の動詞の主語はヲ格でマークされなければならない、元の動詞の主語(「彼」・「国民」)をニ格でマークした次のような文は容認不可能である。

(7)*会社の倒産が彼に悩ませた。

(8)*娘の結婚が彼に喜ばせた。

(9)*地下鉄サリン事件が国民に震え上がらせた。

この現象は一見すると、元の動詞が無意志動詞であることから説明できるように思われる。というのも、次の(10)~(12)のような使役文においても同様の制限が見られることが知られているからである。

(10) 男は水を(／*に)冷凍庫で凍らせた。

(11) 暴漢は後頭部を殴って太郎を(／*に)気絶させた。

(12) その先生は巧みな話術で学生を(／*に)爆笑させた。

すなわち、(10)~(12)の文は原因の使役文ではないが、元の動詞(「凍る」・「気絶する」・「爆笑する」)は無意志動詞であり、元の動詞の主語(「氷」・「太郎」・「学生」)はヲ格でマークされなければならない。

従って、「使役文の元の動詞が無意志動詞である場合、元の動詞の主語はヲ格でマークされなければならない」という原則が成り立っていると考えれば、(7)~(9)の文の容認不可能性はそこから説明されることになる。

しかし、ここで指摘しておきたいのは、次の(13)(14)のような文の容認不可能性である。

(13)*日本に対する絶望が彼にフィリピンへ行かせた。(cf.前掲(4))

(14)*祭りの開放感が彼女に大胆に踊らせた。(cf.前掲(6))

問題なのは、上の(13)(14)の文の容認不可能性が、元の動詞の意志性からは説明できないように思われるということである。なぜなら(13)(14)の文の元の動詞(「(フィリピンへ)行く」・「踊る」)はそれ自体無意志動詞とは考えにくいからである。

一つの考え方は、同じ動詞でも意志的に使われることもあれば無意志的に使われることもあり、(13)(14)の場合は元の動詞が無意志的な使われ方をしているとするところであろう。

しかし、そのような考え方に対しては、次の(15)(16)のような文を反例として挙げることができる。

(15) 日本に対する絶望が彼を(／*に)自らの意志でフィリピンへ行かせた。

(16) 祭りの開放感が彼女を(／*に)意図的に大胆に踊らせた。

すなわち、(15)(16)の文においては、「自らの意志で」「意図的に」といった意志性な

いし意図性を明示的に表す副詞的要素が挿入されているが、やはり元の動詞の主語はヲ格でしかマークできず、ニ格でマークした場合は容認不可能な文となってしまうのである。

また、次の(17)(18)のような使役文が元の動詞の主語をヲ格・ニ格のどちらでもマークできるという事実も考慮されなければならない。

(17) 会社の上司は彼を（／に）フィリピンへ行かせた。

(18) ダンスのコーチは彼女を（／に）大胆に踊らせた。

上の(17)(18)は使役主（「会社の上司」・「ダンスのコーチ」）が原因ではないので、原因の使役文とは別のタイプの使役文である。

従って、これまでの観察からすると、原因の使役文において元の動詞の主語がヲ格でしかマークされ得ないという現象は、元の動詞の性格ではなく、原因の使役文が有する構造に由来するものとして記述されなければならないということになる。

2. 格ボタン制限の例外：二重ヲ格の回避

上で見た原因の使役文の格ボタン制限には例外がある。それは次の(19)(20)の文のように、元の動詞がヲ格を取る他動詞の場合である。

(19) 貧困が彼に（／＊を）法を犯させた。 (cf.前掲(5))

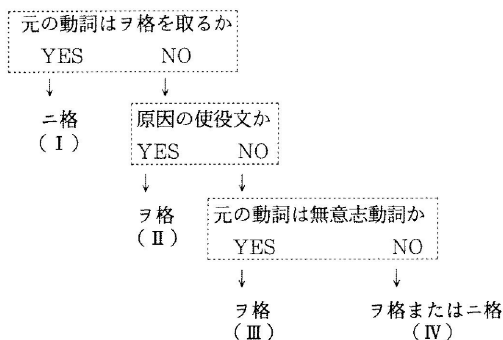
(20) 恋人を傷つけてはいけないとの思いが彼女に（／＊を）嘘をつかせた。

この場合、元の動詞「(法を)犯す」・「(嘘を)つく」がそれ自体ヲ格を取る他動詞であるので、いわゆる二重ヲ格制約（Harada1973）もしくは使役形態素「サセ」の選択制限（阿部1996）に対する違反を避けるため、元の動詞の主語「彼」・「彼女」はヲ格ではなくニ格でマークされている。

つまり、原因の使役文の格ボタンに見られる制限はキャンセル可能であり、二重ヲ格制約のようなものほど強い文法制約ではないということである。

3. 使役文の格ボタン決定のアルゴリズム

これまでの観察を踏まえて、使役文一般について、元の動詞の主語がヲ格・ニ格どちらでマークされるか、その決定過程をアルゴリズムで表示すると、およそ以下のようになる。



(Ⅰ)～(Ⅳ)のタイプに相当する文の例を二文ずつ挙げておく。

- (Ⅰ) a. 先生が学生にテキストを読ませた。
 b. 異常なまでの愛情が彼にそんな行動をとらせた。
- (Ⅱ) a. 学生たちのやる気が教員たちを喜ばせた。
 b. 結婚したことが彼を秘密主義に走らせた。
- (Ⅲ) a. 化学者が実験室で水素を爆発させた。
 b. その男が会議を長引かせた。
- (Ⅳ) a. 添乗員が乗客を飛行機の中で寝させた。
 b. 添乗員が乗客に飛行機の中で寝させた。

但し、上のアルゴリズムは全ての使役文を完全に扱えるというわけではない。不十分な点は今後さらに考察していく必要がある。

4. 出来事の単一性ということ

上述のアルゴリズムは、記述的には言語事実のあり方がある程度捉えていると言えるが、説明的な妥当性という観点からは、全く不十分なものである。例えば、原因の使役文における元の動詞の主語がなぜヲ格でマークされなければならないのか、不明のままである。

そこで、ここでは不十分ながらその点について説明を試みる。

注目したいのは、良く知られているように、原因の使役文は一般に、元の動詞と比較して、項の増減が無いという事実である(注2)。例えば、次の(21a)(21b)を比較すると、両者の項は<経験者>を担うものと<原因>を担うものの2つであって、その間に増減は見られない。

- (21) a. 太郎が妹の結婚を喜んだ。
 b. 妹の結婚が太郎を喜ばせた。

項の増減が見られないことから、(21b)の文は認識的に単一の出来事を表しているという言い方をしても良いであろう。それに対して、次の(22b)のような原因の使役文ではない使役文の場合は、元の動詞と比較して項が一つ増加しており、認識的に二重の出来事あるいは出来事の連鎖を表していると考えられる。

例 a. 太郎が学校を休んだ。

b. 母親が太郎に学校を休ませた。

そこで、やや漠然とした言い方ではあるが、「使役文の表す出来事の単一性が高ければ高いほど、元の動詞と使役形態素「サセ」の融合度も高い」という仮説を立てることができるかもしれない。元の動詞と使役形態素「サセ」の融合度が高いということは、構造的には、元の動詞の主語が使役形態素「サセ」の指定部に移動し、指定部－主要部一致 (spec-head agreement) によってヲ格を具現することと関係すると考えれば、ある程度説明の方向が見えてくるように思われる。

また、以上のように考えれば、先に見た無意志動詞を元の動詞とする使役文に見られる格パタンの制限も同様に説明される可能性がある。

但し、現段階では上述のような可能性を指摘するだけにとどめ、より深い考察は後の研究に委ねることとする。

5. おわりに

本稿で行った考察をまとめると、以下ようになる。

- 1) 原因の使役文に見られる格パタンの制限についての指摘と分析
- 2) その格パタンの制限の例外の考察
- 3) 使役文一般の格パターン決定のアルゴリズムの作成
- 4) 説明に向けての方向性の示唆

注

- 1) 「原因の使役文」という名称は、井上 (1976) に倣った。
- 2) もっとも、感情動詞以外の動詞が元の動詞であるような原因の使役文についても同じことがいえるかどうかについては、問題がある。例えば;
I) a. 彼は貧困の故に法を犯した。
b. 貧困が彼に法を犯させた。
という文における「貧困」が動詞「犯す」の項であるとは考えにくい。

参考文献

- 阿部 忍(1991)「認識動詞構文の構造と格」『待兼山論叢』第25号日本学篇
(大阪大学文学会), pp.17-31.
阿部 忍(1996)「二重ヲ格制約と日本語の使役構文」『日本学報』第15号

- (大阪大学文学部日本文学研究室), pp.65-76.
- 井上和子(1976)『変形文法と日本語』上. 大修館書店
- Chomsky,N(1981) *Lectures on Government and Binding*. Foris.
- Chomsky,N(1995) *The Minimalist Program*. MIT Press.
- Fujita,K(1993) Object movement and binding at LF. *Linguistic Inquiry* 24-2, Spring, pp.381-388.
- Fujita,K(1996) Double objects, causatives, and derivational economy. *Linguistic Inquiry* 27-1, Winter, pp.146-173.
- Harada,S-I(1973=1986) Counter Equi NP Deletion. *Papers in Japanese Linguistics* 11(1986):157-201.(Reprinted from the Annual Bulletin 7 (1973) of the Research Institute of Logopedics and Phoniatrics, University of Tokyo).
- Kuroda,S-Y(1965) Causative forms in Japanese. *Foundation of Language* 1: 30-50.
- McCawley,N.Akatsuka(1976) Reflexivization:a transformational approach. in Shibatani,M(ed.), *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*. Academic Press, pp.51-116.